

コラム 22 日露戦争における日本側の捕虜の扱い

2005年1月、松山大学から「マツヤマの記憶」日露戦争100年とロシア兵捕虜という本が出版されました。これによると当時の日本政府によるロシア兵捕虜に対する扱いは国際法に基づき模範的な形で行われました。特に、松山の捕虜収容所（写真）は地元の対応が極めて良かったことから「マツヤマ！」と叫んで投降するロシア兵がたくさんいたともいわれています。



松山の捕虜収容所

当時巡查の初任給の日給が、1日あたり40銭であった時に、日本政府は捕虜になったロシア将兵の給養糧食に莫大な金額を費やし、食費だけで将校には1日あたり60銭、下士官以下には30銭を当てており、これは自国の兵卒の在營時の食費が1日16銭にすぎなかったことを考えると破格の待遇であったと言えます。松山ではさらに、ロシアの将校には遊郭への出入りも許したとのことであります。

さらには、ロシア人将校の捕虜で、負傷したフォン・マイルという将校は松山の収容所にいたが、本国の妻がロシアからの来日をゆるされ、夫の看病にあたることができたといえます。この妻ソフィアが書いた「日露戦争下の日本」（小木曾龍・美代子訳）によると、戦争のさなかに日本の民家を借りて、収容所に通うことを許されました。そして、松山の町の人々は、お月見や温泉に夫人を誘って慰めました。やがて戦争に勝利し、戦勝の祝賀行列で市内がお祭りさわぎに沸き立てば「お国の傷病兵（捕虜）の心を傷つけて申し訳ない」と愛媛の県知事が夫人にわざわざ詫びに行ったといえます。

また、日本海海戦で勝利を収めた東郷平八郎大将は、海戦が終わった5日後に、捕虜になった敵の司令官ロジェストウエンスキーを、佐世保の海軍病院に見舞いました。

東郷司令長官は、傷ついた敵の提督を見舞い、「困難な大遠征の成功は見事で、将兵にいたるまで、最後までよく戦われた。心おきなく、養生して回復されてください。」と、その勇戦を讃え、労りの言葉をかけました。ロジェストウエンスキーは、感激して返す言葉もなく、涙ながらに「私は、あなたのような名将と戦い、敗れても悔いはない。」と述べたといえます。日本は、軍人も国民も、国を挙げて捕虜を丁重に扱ったのであります。